

調査年報 3

平成2年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター



調査年報 3

平成 2 年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

目 次

I. 平成2年度の調査	
1. 調査の概要	1
2. 調査遺跡	3
美々3遺跡	3
美沢3遺跡	7
美々8遺跡	9
滝里38遺跡	15
滝里7遺跡	19
咲来2遺跡	21
牛舎川右岸遺跡	26
稲府川遺跡	27
谷藤川右岸遺跡	28
共栄3遺跡	32
共栄2遺跡	35
上清水2遺跡	37
上清水4遺跡	39
東松沢2遺跡	41
フゴッペ貝塚	43
3. 研修・研究会等	49
4. 刊行報告書	51
5. 組織と機構	52
II. 講演会記録	53

凡 例

- 1) I. 2. 「調査遺跡」で遺跡名の後に付した()内は、道教委文化課の埋蔵文化財包蔵地登録番号である。
- 2) 各遺跡の位置図は、それぞれ国土院院発行の2万5千分の1あるいは5万分の1図を複製または縮小利用したものである。

I. 平成2年度の調査

1. 調査の概要

本年度は14ヵ所の遺跡で発掘調査を実施した。関連工事別にみると、新千歳空港建設工事用地内の調査は当センター発足（昭和54年）以前の昭和51年度に始まり、今年度で15年目となる。北海道縦貫自動車道建設に伴う調査も、昭和54年度以来継続して行われており、今年度からは十勝管内で北海道横断自動車道建設用地内の調査も開始された。滝里ダム建設に伴う調査は昨年度から実施、天塩川改修工事に伴う調査は昭和55～58年度の補遺跡以来2回目である。

これら14遺跡のほか、昨年変現地調査を行った余市町フゴッペ貝塚の整理作業も実施した。次に、本年度の調査について、おもな成果を時代順にふれてみよう。

旧石器時代—清水町共栄3遺跡では、縄文時代の遺物包含層調査後のトレンチ発掘により、旧石器時代の遺物が出土した。本格的な調査は来年度に予定されている。

縄文時代早期—内浦湾に面した伊達市の牛舎川右岸・稀府川・谷藤川右岸、道東の清水町共栄3・上清水2・東松沢2の各遺跡で、この時期の貝殻文土器が多数出土した。牛舎川右岸遺跡では貝殻文尖底土器の良好な資料が復原されている。共栄3遺跡では、中茶路式土器を伴う堅穴住居跡と土壇が検出された。千歳市美沢3遺跡では、一昨年に続き石刃藤1点が出土、東銅路IV式土器に伴うものとみられる状耳飾りもみつかった。

縄文時代前期—清水町上清水4遺跡と芦別市滝里38遺跡で、網文式土器を伴う焼土が検出されている。伊達市稀府川遺跡では春日町式に相当する尖底土器、清水町東松沢2遺跡では、中野式土器や押型文土器が出土している。

縄文時代中期—千歳市美々3遺跡で、大規模な集落跡が発掘された。堅穴住居跡34軒のうち重複関係から、遺構・遺物の新旧をとらえることができるものがある。清水町共栄3遺跡ではTピットが32基発掘され、このうちの1基が大型の土壇を切っていることが判明した。大型土壇の詳細な調査は来年度に予定されている。同じく清水町共栄2遺跡では、北筒式土器と10万点をこえる黒曜石の剥片が出土した。

天塩川右岸の音威子府村咲来2遺跡では、土壇16基のほか、焼土周辺の遺物出土状況から「作業場」と推定される地点が検出された。空知川左岸の芦別市滝里38遺跡では、円形の土壇が33基発掘されている。

縄文時代後期—千歳市美々3遺跡で、後期初頭の集落跡が発掘された。堅穴住居跡は6軒、卵形・台形・隅丸長方形などのプランがあり、重複から新旧関係が分かる。伊達市稀府川遺跡では、手稲式土器の良好な資料が得られた。

縄文時代晩期—千歳市美々3遺跡では、この時期の集落跡もみつかった。堅穴住居跡は4軒、土壇24基。住居跡のうち1軒は長軸9mに及ぶ隅丸長方形のプランをもつ。このほか、芦別市滝里7・伊達市牛舎川右岸遺跡でも、この時期の土器が多数出土している。

縄縄文時代・縄文時代—この時期の遺構・遺物を主体とする遺跡は調査されなかったが、伊達市牛舎川右岸・稀府川・千歳市美々8の各遺跡で、縄縄文の恵山式・後北式土器や縄文の深鉢・杯などが出土している。

中・近世—千歳市美々8遺跡のうち、美沢川左岸低湿地の一部を調査。おびたしい数の杭跡や板材などが出土しており、ここに船着場があつたものと推定されている。出土した木製品には、火きり板・ヘラ・杓子・漆塗碗・舟の櫂・板綴舟の側板など、当時の木工技術を知る上で貴重な資料が多数ある。来年度以降も調査が継続される予定である。

今回、整理作業のみを実施した余市町フゴッベ貝塚の遺物は、土器・石器・骨角器など計120万点あまりに及ぶ。縄文時代前期から中期の土器が百数十個体復原されたほか、フローテーションにより堅穴住居跡の焼土から炭化した栽培種のヒエが検出されている。本遺跡は今後、道央部における標識的な遺跡となろう。

平成2年度調査一覧

遺跡名	所在地	調査面積(m ²)	関連工事名	備考
			調査委託者	
美々3	千歳市	9,225	新千歳空港建設	昭和61、平成元年度調査
美沢3	苫小牧市	7,150		昭和51、53、55、63、平成元年度調査
美々8	千歳市	215	北海道開発局(札幌)	昭和56、57、60、62、平成元年度調査
滝里38	芦別市	3,600	滝里ダム建設	平成元年度調査
滝里7	〃	3,700	北海道開発局(石狩川)	新規調査・継続
咲来2	音威子府村	1,512	天塩川改修	新規調査・継続
			北海道開発局(旭川)	
牛舎川右岸	伊達市	6,280	北海道縦貫自動車道	平成元年度調査
稀府川	〃	7,477		平成元年度調査
谷藤川右岸	〃	350	日本道路公団(札幌)	平成元年度調査
共栄3	清水町	8,290	北海道横断自動車道	新規調査・継続
共栄2	〃	1,710		新規調査
上清水2	〃	640		新規調査・継続
上清水4	〃	900	日本道路公団(札幌)	新規調査
東松沢2	〃	2,885		新規調査・継続
フゴッベ貝塚	余市町	—	広域営農団地農道整備 北海道後志支庁	平成元年度調査・整理作業
計		53,934		

2. 調査遺跡

美々3遺跡 (A-03-98)

事業名：新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査

委託者：北海道開発局札幌開発建設部

所在地：千歳市美々988-25ほか

調査面積：9,225 m²

発掘期間：平成2年5月7日～10月20日

調査員：大沼忠春、和泉田毅、工藤研治、鈴木 信、中田裕香

遺跡の概要

新千歳空港建設に伴う埋蔵文化財埋蔵地の発掘調査は、昭和51年度から始まり、今年度は第15年次に当たる。用地内で現在までに確認されている遺跡は16カ所にのぼり、その合計面積は26万m²をこえる。

美々3遺跡は美沢川左岸台地上とそれに続く斜面に位置し、東側は美々4遺跡に接している。本遺跡は昭和61・平成元年度に調査が実施されている。今年度は昨年度調査区の南側、標高12～24m、台地上とそれに続く斜面部分の9,225m²について調査を行った。これまでの調査から、縄文時代中期後葉～後期初頭の遺跡の主体部に当たるのではないかと予測された。調査の結果、中期後葉、後期初頭、晩期中葉の住居跡（竪穴状遺構と掘立柱建物跡等を含む）と中期後葉～晩期の土壇、焼土などが多数検出され、同時期の遺物も多量に出土した。なかでも中期後葉の遺構・遺物が主体をなしている。このような検出状況は、中期後葉～晩期にかけて当地域が生活の場とされていたことを物語っており、とくに中期後葉には集落の中心部分を占めていたと考えられる。

遺構と遺物

第II黒色土層からの検出遺構は、住居跡44軒、土壇90基、焼土120カ所、Tビット1基、集石1カ所、フレイク・チップの集中21カ所、動物の足跡2カ所である。縄文時代中期後葉の頃のもの、住居跡34軒、土壇36基、焼土85カ所、集石1カ所、フレイク・チップの集中21カ所である。後期初頭のは住居跡6軒である。晩期のは、住居跡4軒、土壇24基、焼土36カ所、動物の足跡2カ所である。

縄文時代中期後葉：住居跡はおおむね調査区の北東部と南東部にまとまっている。平面形は



遺跡の位置

(1. 美々3遺跡 2. 美沢3遺跡 3. 美々8遺跡)

卵形のものが多いが、他に楕円形、隅丸長方形のものもある。大きさは長径2m内外のものから最大径9mのものとなかなりバラつきがある。長軸方向も一定していない。柱穴は壁際、壁面に直立するものや内傾するものがあり、また床面に4本、6本、8本と規則的な主柱穴のあるものもある。炉跡は6軒で確認されている。他に「先端ビット」状のものや出入口を思わせる段状の張り出し部分のあるものもある。これらは概して長軸方向の先端部付近につくられている。中期後葉の住居跡はノダップⅡ式土器、レンガ台式土器、北筒式土器を伴うものであるが、なかでも北筒式土器を伴うものが圧倒的に多い。重複、切り合いが顕著に見られることから同時期内での新旧関係などを検証し得る良好な資料と考えられる。土壌と焼土は、おおむね調査区の中央部分にまともまっている。土壌のうち墓と考えられるのは2基(P-23、38)で、他は性格不明のものである。住居跡周辺の揚げ土上面と土壌、焼土の周辺でフレイク・チップがまともって出土している。

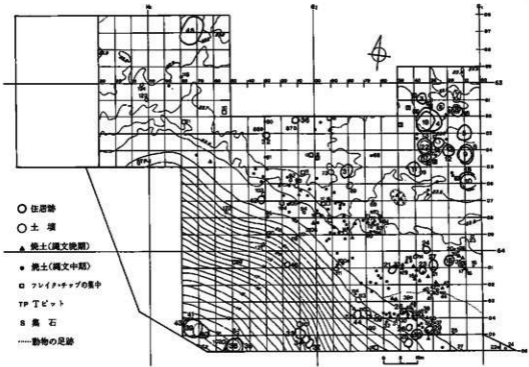
縄文時代後期初頭：住居跡は斜面低地部の緩斜面で検出されている。2カ所で重複しており平面形は、古い時期のものが卵形で、新しい方が丸味をもつ台形、隅丸長方形状である。柱穴はともに壁際に直立するもので、壁面、壁外に内傾する小ビットがめぐっている。炉跡は最も古いと考えられる住居跡(H-40)で土器器炉が確認されているが、他は不明である。余市式土器を伴っており、同時期の主体部は調査区の南側、美沢川寄りにあるものと考えられる。

縄文時代晩期：住居跡は調査区の北東部にまともっており、北西部で1軒検出されている。H-45は平面形が隅丸長方形で、長軸約9mの大型住居跡である。浅い掘りこみで、焼土が確認されている。他は平地住居状のもので、柱穴が検出されているだけである。土壌と焼土は調査区の南東部にまともまっている。土壌の大きさ、平面形などは一定しないが、遺物の出土状況、覆土の堆積状態などからみて土壌墓と考えられる。焼土周辺からは多量の遺物が伴出した。

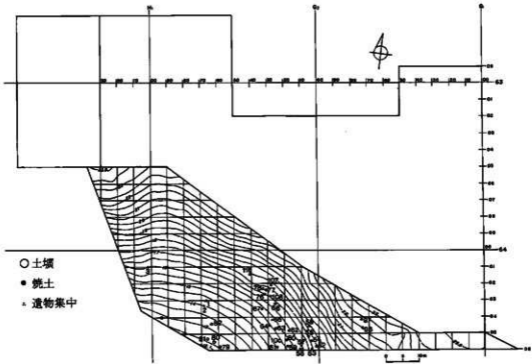
第Ⅰ黒色土層からの検出遺物は、土壌26基と焼土1カ所である。土壌は晩期後葉のものである。径約0.9m、深さ約1mほどで、平面形はほぼ円形である。土壌墓と考えられる。

第Ⅱ黒色土層出土の遺物総点数は約235,700点で、その内訳は土器約56,800点、石器約4,300点、礫約2,150点、フレイク・チップ約172,400点である。土器は縄文時代早期、前期、中期、後期、晩期の各期のものが出土しているが、主体は中期後葉の北筒式土器と晩期の大洞C₂式前期のものである。これらは調査区全体から出土しているが、とくに前者は北東部と中央部で多く出土し、後者は南東部から多く出土している。後期初頭の余市式土器は、重複している住居跡から良好な状態で出土している。石器は石鏃、石槍、石斧、砥石、石皿、台石などが出土している。石槍と石斧未成品はまともって出土する傾向がみられ、また四面砥石の出土も注目される。石製品ではペンダント、玉などが出土している。

第Ⅰ黒色土層出土の遺物総点数は3,355点である。その内訳は、土器3,284点、石器11点、礫3点、フレイク・チップ57点である。土器は晩期後葉のものが大半を占めている。



美々3遺跡 第Ⅱ黒色土層遺構位置図



美々3遺跡 第Ⅰ黒色土層遺構位置図



遺構調査状況（第Ⅱ黒色土層）



焼土と遺物の検出状況（第Ⅱ黒色土層）



H-40の土器囲炉（第Ⅱ黒色土層）



P-67の土器出土状況（第Ⅰ黒色土層）

美沢3遺跡 (J-02-81)

事業名：新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査

委託者：北海道開発局札幌開発建設部

所在地：苫小牧市美沢164番地ほか

調査面積：7,150 m²

発掘期間：平成2年5月7日～10月20日

調査員：大沼忠春、田才雅彦、田口 尚

遺跡の概要

本遺跡は、美沢川を挟んで対面する美々8遺跡に次ぐ面積(約4万m²)を占めており、このうち28,172m²の調査がすでに実施されている。その結果を概括すると、縄文時代における主たる居住生活域は、早期から後期の遺構が集中する標高10m以下の舌状平坦面で、標高15m以上の地域では、北西部の小舌状部先端から斜面にかけてみられる縄文時代晩期の土壌群と、北流する沢跡付近に存在するTピットが目立つのみで、住居跡はみられない。

今年度は、遺跡の南側中央部(A地区)4,550m²と、東南部(B地区)2,600m²の、いずれも標高20m前後の丘陵頂部から斜面部分を対象に発掘調査を実施した。

遺構と遺物

遺構は、A地区でTピット2基(T-22・23)を確認した。T-22は墳底面に若干の長軸方向のずれと段差がみられるものであるが、覆土の状況から切り合い関係ではなく、南西側から北東側へ拡張したものと思われる。なお、墳底面に皿状の小ピットをもつが、杭穴は認められない。T-23は4本の杭穴をもつもので、杭を打ち込んだあと、その根元部分にロームを埋め込んで支えとしている。

出土遺物総数は11,629点で、このうち土器片が8,464点である。主体をなすのは縄文時代早期の中茶路式4,379点と、東鋼路IV式3,903点で、このほか縄文時代後期・晩期の遺物がわずかに出土している。遺物の時期別分布をみると、中茶路式はB地区東斜面を中心に、B地区のほぼ全域に広がっており、A地区では北半部にみられる。東鋼路IV式は大半がA地区北半部から出土しており、A地区南半部にも散点的にみられるが、B地区には全くなく、中茶路式とは対照的な分布状態になっている。縄文時代後期(手稲式、盛潤式、御殿山式)と、晩期(幣舞式)の土器片は、A地区にわずかにみられるのみで、B地区にはみられない。

石器類は3,000点余りが出土している。器種別には、石鏃がもっとも多く、次いでつまみ付きナイフ、石斧、たたき石などが目立つ。

なお、昭和63年度調査で3点確認されていた石刃鏃が、今回の調査でもB地区の樽前d、火山灰層上より1点出土した。

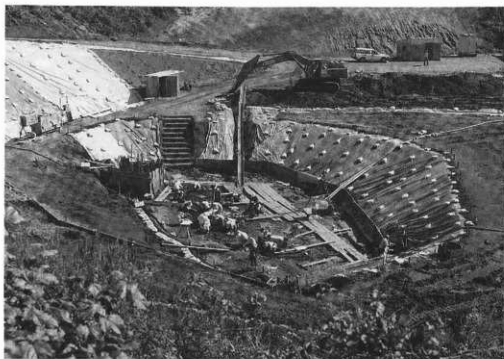
また、東鋼路IV式期に伴うと思われる袂状耳飾1点も得られている。



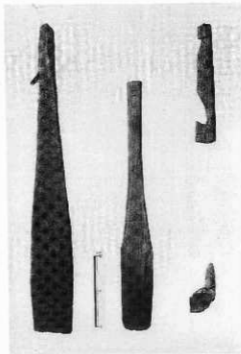
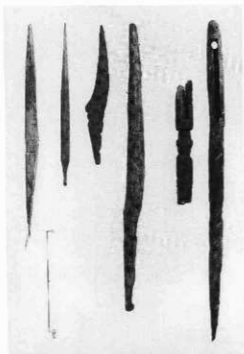
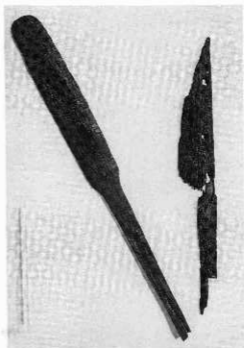
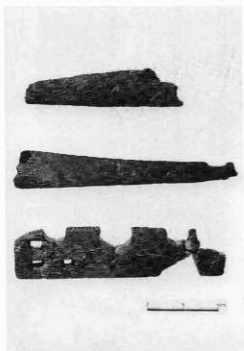
美々8遺跡 木製品出土状況



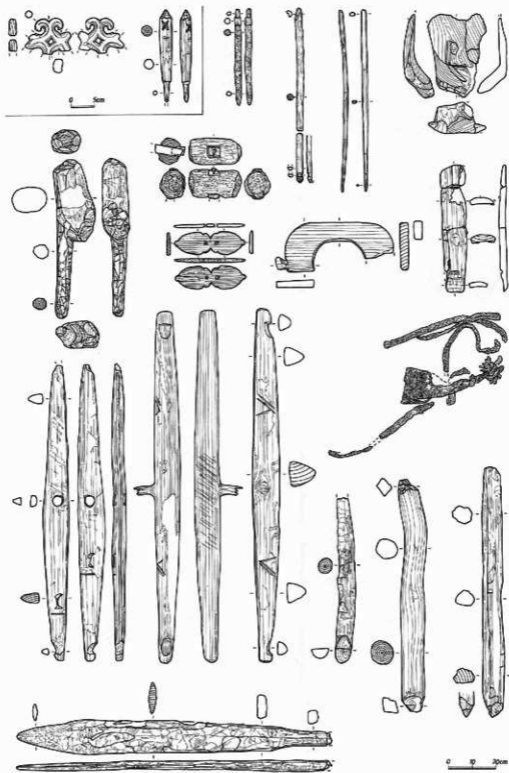
美々8遺跡 平成元年度試掘調査前状況



美々8遺跡 平成2年度調査状況



美々8遺跡 平成2年度出土木製品



美々8遺跡 平成元年度出土木製品・繊維製品

滝里38遺跡 (E-04-87)

事業名：滝里ダム建設事業用地内埋蔵文化財発掘調査

委託者：北海道開発局石狩川開発建設部

所在地：芦別市滝里町31-4

調査面積：3,600 m²

発掘期間：平成2年5月7日～7月18日

調査員：千葉英一、長沼 孝、佐川俊一、中田裕香、皆川洋一

遺跡の概要

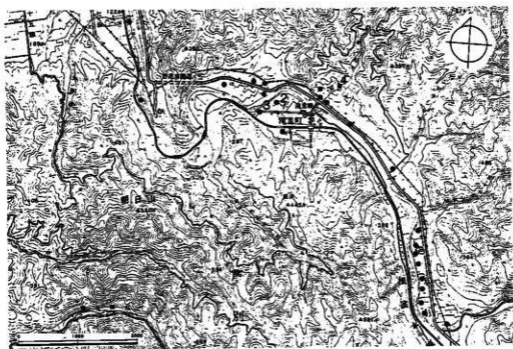
空知川によって形成された大きな谷の谷底には、河川に沿って多数の遺跡が分布している。滝里38遺跡は、滝里ダムによって水没する33カ所の遺跡の一つで、発掘調査は平成元・2年度の2回に分けて実施した。調査面積は元年度900 m²、2年度3,600 m²の計4,500 m²である。

滝里38遺跡は、空知川左岸の標高約133 mの低位段丘群上に立地している。基本層序は、I層が耕作土、II層が腐植土層、III～VII層が河川の氾濫を起源とする砂と粘土の互層で、VIII層の礫層に至る。遺構、遺物はおもにII層の腐植土層から検出されている。

遺構と遺物

遺構は、土壇、集石、フレイク・チップの集中、焼土などが検出された。

土壇は33基 (P-1～33) が検出されている。P-1は、平面が楕円形で底面に杭穴1カ所を有するTピットである。P-2～33は、径0.9 m～2.4 m、深さ0.26 m～1.1 mの円形または楕



遺跡の位置と周辺の遺跡 (1. 滝里23遺跡 2. 滝里38遺跡 3. 滝里39遺跡 4. 滝里7遺跡)

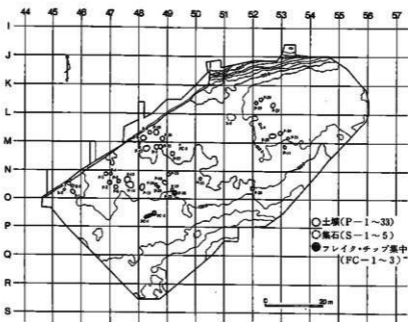
円形を呈するもので、その一部は墓墳と考えられる。墓墳は、覆土が埋め戻しの土で、覆土中あるいは墳底付近から土器片や円礫などが出土している。土墳は3~7基が一定の範囲に集中して“群”を形成するものと、単独のものが認められる。前者の“土墳群”は、5カ所認められた。時期は、数基の土墳にいわゆる“シュブノツナイ式”と考えられる土器片が伴うことから縄文時代中期初頭と考えられる。

集石は腐植土層中(S-4, 5)と腐植土層を除去した面(S-1~3)から5カ所検出されている。いずれの集石にも熱による赤化や破砕が認められるが、炭土を伴うものは皆無である。時期は不明である。

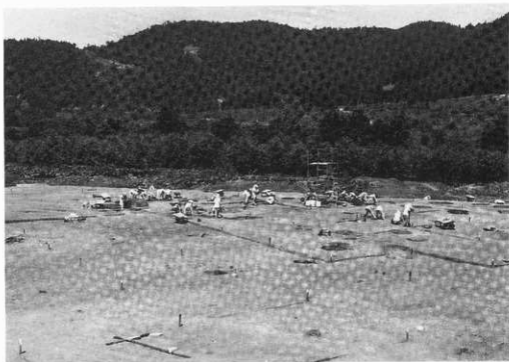
フリイク・チップの集中は腐植土層中から3カ所(FC-1~3)検出されている。石材は円礫状の黒曜石で、大部分が1cm以下のものである。

焼土はVI層(砂層)中から1カ所(F-1)検出された。付近には網文式土器、黒曜石製の三角形の石鏃やスクレイパーなどが出土している。時期は、縄文時代前期初頭と考えられる。

出土遺物の総点数は9,841点で、内訳は土器345点、石器等9,336点、その他160点である。遺物包含層のうち、腐植土層からは縄文時代中期、礫層に近い砂層中からは前期の遺物が検出されている。土器はきわめて少ないが、網文式土器と羽状縄文の施文された器壁の厚い土器片および櫛歯状工具で刺突文を施したいわゆる“シュブノツナイ式”が出土している。石器には、石鏃、スクレイパー、つまみ付きナイフ、石斧、たたき石、すり石(北海道式石冠)、台石などがある。また使用痕のある円礫や礫片が多く、施成を受けているものも少なくない。



滝風38遺跡 遺構位置図



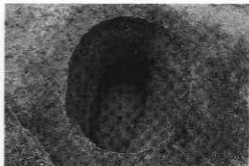
滝里38遺跡 調査風景



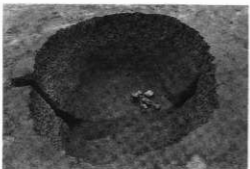
滝里38遺跡 土坑群



P-2 遺物出土状況



P-1



P-12



S-2



網文土器出土状況

滝里7遺跡 (E-04-09)

事業名：滝里ダム建設事業用地内埋蔵文化財発掘調査

委託者：北海道開発局石狩川開発建設部

所在地：芦別市滝里町 297-1

調査面積：3,700 m²

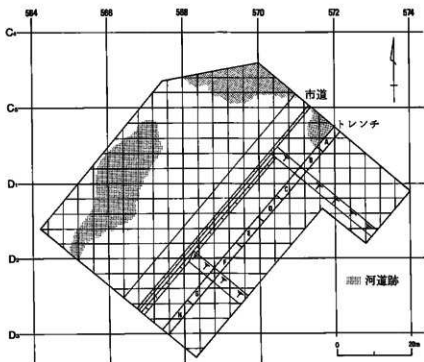
発掘期間：平成2年6月14日～8月10日

調査員：千葉英一、長沼 孝、佐川俊一、中田裕香、皆川洋一

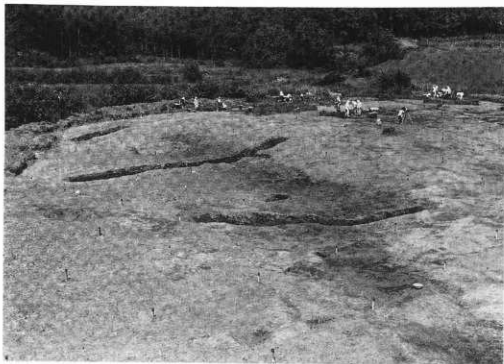
遺跡の概要

本遺跡は、空知川に注ぐ小河川ボンルベシベ川の形成した、沖積錐上および氾濫原上に立地している。標高は150m前後である。遺跡は調査以前には畑地、水田、市道として利用されており、遺物の多くは耕作土や盛土の中から出土した。遺構は確認されていない。調査区の北東部にひろがる河道跡には包含層が残存しており、フレイクの集中が2ヵ所で認められた。河道跡は調査区の西側でも検出され、その埋土には未炭化の木片や炭化物等が含まれていた。

遺物の総点数は約43,000点で、その90%は黒曜石のフレイクである。土器は縄文時代晩期後半のものが主体で、約2,500点出土している。石器は石鏃やスクレイパーが多く、ポイント、つまみ付きナイフ、石斧、丸のみなどもみられる。トレンチ内の盛土から黒曜石の有舌尖頭器が出土している。



滝里7遺跡 調査地区



河道跡（西側）上面



河道跡（東側）調査状況



河道跡（北側）調査状況

咲来2遺跡 (F-23-4)

事業名：天塩川改修工事の内咲来河道掘削工事埋蔵文化財発掘調査

委託者：北海道開発局旭川開発建設部

所在地：中川郡音威子府村字咲来河川敷地

調査面積：1,512 m²

発掘期間：平成2年8月20日～10月12日

調査員：千葉英一、佐川俊一、熊谷仁志、皆川洋一

遺跡の概要

咲来2遺跡は、天塩川右岸の標高41mの沖積低地に立地する縄文時代中期の遺跡である。本遺跡の一部は、昭和54年に岩屋朝吉氏が著した『教材観に立脚した先史文化の調査と解説』で、「咲来小学校北側の遺跡」として縄文時代中期の遺物と共に紹介されている。

遺跡は、昭和61年に構築された築堤と天塩川との河川敷地内に位置するA～C地区の3ヵ所からなっており、今年度はA地区について調査を実施した。調査面積は当初1,500m²であったが、遺物の広がりや調査区域外に延びることが確認されたため、調査区北側に拡張した。これと同時に調査区域内で遺物包含層が削平された南側部分などを除外して、総面積1,512m²の調査を実施した。

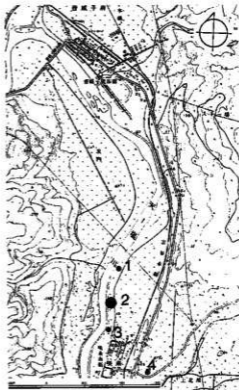
調査区域の地形は、西側に広がる標高141～142mの平坦部と東側に位置する幅約10mの南北にのびる旧河道からなっている。

平坦部の土層はI層が耕作土層、II・III層は腐植土層、IV層以下は砂と粘土の厚い互層となっている。縄文時代中期の遺構や遺物は、おもにIII層で検出されている。旧河道は平坦部のIV層以下を切って形成されており、埋設土の土層は上から、I層、II層、粒径の異なる砂の互層、粘土層、III層、黄褐色粘土層などである。III層からは、縄文時代中期の集石、焼土などの遺構や遺物が出土することから、この河道はそれ以前に形成されたと考えられる。

遺構と遺物

遺構は平坦部で土壌16基、平坦部から旧河道にかけての緩斜面で集石4ヵ所と焼土4ヵ所が検出されている。

土壌(P-1～16)は、径30～50cm深さ10～20cm程度のものが、径約8mの環状を呈する

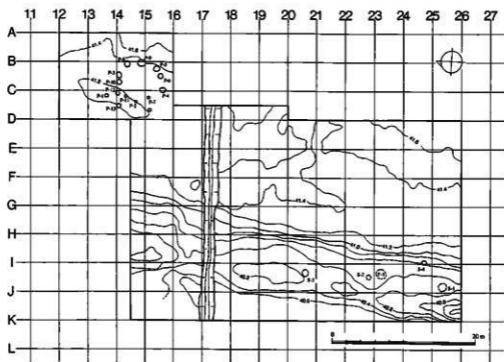


遺跡の位置 (1. 咲来1遺跡 2. 咲来2遺跡
3. 咲来3遺跡 4. 咲来6遺跡)

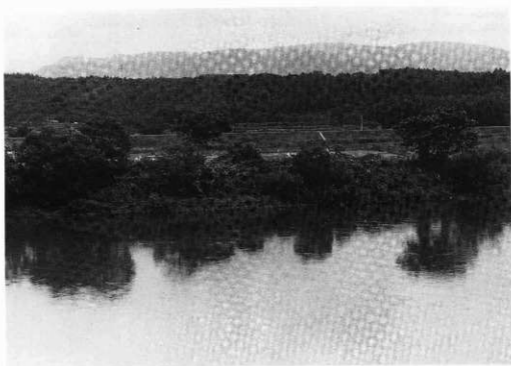
状態で検出されている。縄文時代中期の遺物が最も集中した区域にあり、覆土には焼土粒や炭化物などが顕著に認められる。炉跡はないが、住居に伴う柱穴の可能性もある。

集石(S-1~4)には焼成を受けた拳大の礫で構成されるもの(S-1~3)と円礫を打ち欠いた礫片で構成されるもの(S-4)とがある。前者の礫には著しい赤化や熱による破碎、風化などが認められるが、焼土はなく少量の炭化物が検出されたにすぎない。焼土(F-1)は径1m程のはば円形を呈している。その場で焼成されたもので、集石の礫をこの地点で焼いたことも考えられる。これら集石・焼土の周辺では、台石の周辺に黒曜石製のスクレイパーが集中する、いわゆる「作業場」と考えられる出土状況が認められる。

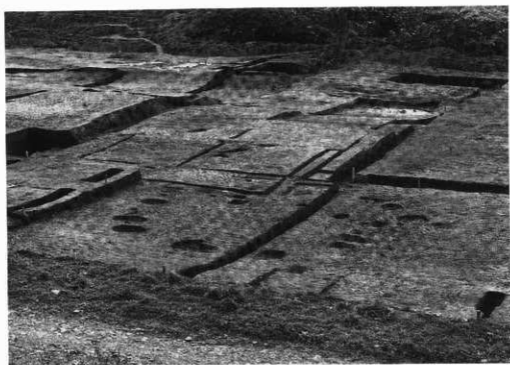
遺物は土器、石器、礫などが約15,000点出土しており、平坦部では包含層の残りの良い自然地形の窪地に集中して発見されている。土器は、北筒式、智東式などが多い。石器は、黒曜石製のポイント類、スクレイパー類が多く、磨製石斧、砥石、たたき石、すり石なども出土している。旧河道のうち「作業場」を除く部分では、羽状縄文の施された土器や、黒曜石製のポイント、スクレイパー、砥石、礫などの石器が散点的に出土している。



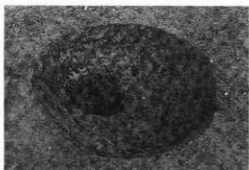
叡来2遺跡 遺構位置図



遺跡遠景



土壇群



P-4



遺物出土状況



集石



旧河道部調査状況

牛舎川右岸遺跡 稀府川遺跡 谷藤川右岸遺跡

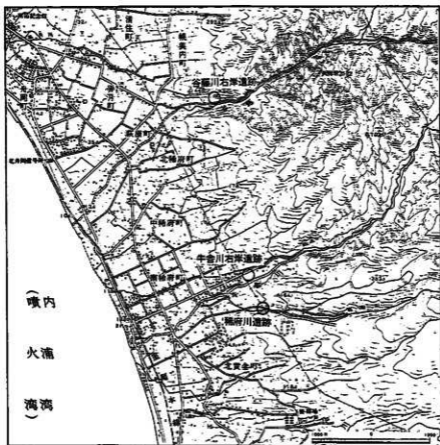
事業名 北海道縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査

委託者 日本道路公団札幌建設局

伊達市南東部では北海道縦貫自動車道建設工事に伴い、3カ所の遺跡で発掘調査を実施した。いずれも昭和56年度の所在確認調査で発見された遺跡である。事前発掘調査（試掘調査）は、昭和62年度から平成元年度にかけて実施、これと並行して、昨年度より本格的な発掘調査に入った。3遺跡のうち、谷藤川右岸遺跡の調査範囲は、工事が当面施工される二車線分である。

各遺跡とも、内浦湾に注ぐ河川が形成した小規模な扇状地に立地しており、昨年度の調査では、縄文時代早期から擦文時代の遺構・遺物のほか、近世・近代のものも検出されている。

谷藤川右岸遺跡の今年度調査区は現状保存の予定だったが、市道改良部分の一部工法変更により、発掘調査を実施したものである。牛舎川右岸・稀府川の両遺跡は今回をもって、調査を終了した。谷藤川右岸遺跡は将来、拡張の際に、さらに調査することになる。



遺跡の位置

牛舎川右岸遺跡 (J-04-06)

所在地：伊達市南稀府町 307 ほか

調査面積：6,280 m²

発掘期間：平成 2 年 5 月 9 日～8 月 31 日

調査員：佐藤和雄、葛西智義、三浦正人、花岡正光

遺跡の概要

本遺跡は牛舎川の河口より約 2.5 km 上流の扇状地にある。調査区は標高 76～81 m、牛舎川の右岸から北側にのびている。今年度の調査地点は北端に位置しており、調査前までは一部を除いて水田になっていた。

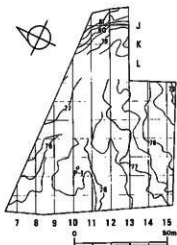
今年度の調査では、調査区を横断する沢跡が検出され、これに沿って、おもに縄文時代早期や晩期の遺物が出土した。遺物の分布は昨年度の調査区寄りになると稀薄になる。昨年度の調査では、調査区南端の牛舎川沿いに縄文時代中期を主体にした遺構・遺物が確認されている。

これらのことから、両年度の調査区では、遺跡の内容が異なることが判明した。

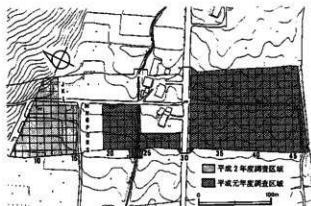
遺構と遺物

遺構は土壌 1 基と焼土 244 カ所が検出された。土壌の時期・性格は不明である。焼土のうち調査区東側の 10 カ所からは縄文時代晩期末葉の遺物が出土している。

出土遺物は、8,998 点である。このうち土器片は 5,422 点で、縄文時代晩期前葉の上ノ国式、晩期末の大洞 A 式、早期の貝殻文尖底土器が大半を占める。このほかに続縄文時代の恵山式、後北式、縄文時代早期の東銅路 IV 式、中期のトコロ 6 類などもある。石器は 143 点出土。石鏃、ポイント、ナイフ、スクレイパー、石斧などがある。器種別にみると石鏃が多い。砥石、すり石、台石などは検出されていない。ほかに 3,357 点のフリイクがある。石質は黒曜石、頁岩、安山岩、めのうで、このうち頁岩が最も多い。



牛舎川右岸遺跡 遺構位置図



調査地区

稀府川遺跡 (J-04-67)

所在地：伊達市北黄金町106-2ほか

調査面積：7,477 m²

発掘期間：平成2年5月7日～8月27日

調査員：鬼柳 彰、遠藤香澄、谷島由貴、森岡健治、越田雅司、山原敏朗

遺跡の概要

稀府川遺跡は牛舎川の支流、稀府川が形成した小規模な扇状地に立地している。昨年度は、このうち、稀府川左岸の全域と右岸の一部を発掘し、左岸側で縄文時代後期から統縄文時代の竪穴住居跡6軒、右岸側で土壇7基を発掘した。今年度の調査区は、右岸の川岸より北方へ約100mの範囲で、工事用地になる前は南東部が住宅地、中央部が畑、北端部が水田であった。

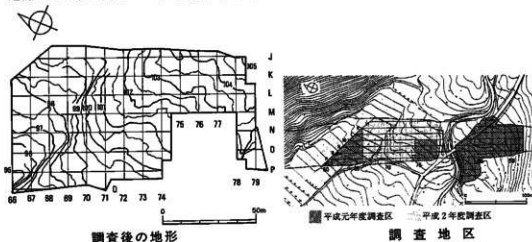
耕作土の下には有珠山起源の火山灰層が2枚あり、遺物包含層はこの下の第5層（褐色土）と第6層（褐色ローム質土）である。扇状地の基盤は安山岩の礫層からなり、遺物包含層中にも大小の安山岩が多量に含まれている。調査区は中央部が最も高く、これより北側は大規模な河道跡となっている。南側でも、中央部より低く浅い沢状の地形が確認された。

遺構と遺物

今回の調査で出土した遺物は、土器片、石器、剥片など計約9,000点、縄文時代早期から擦文時代までのものがある。土器は縄文時代早期の貝紋文、前期の春日町式に相当する尖底土器、中期の柏木川式や大安在B式系統のもの、後期の手稲式、堂林式、三ツ谷式、晩期の大洞C₁～C₂・A式に相当するもの、統縄文時代の恵山式、擦文時代の土器などがある。このうち、手稲式土器は大型の深鉢で、調査区南部に数個体が出土した。晩期の土器や擦文土器は調査区中央東側の高い部分から、恵山式土器は北端の河道跡より焼土に伴って出土した。

石器は石鏃、ポイント、つまみ付きナイフ、ドリル、スクレイパー、石斧、すり石などのほか、垂飾片が1点ある。また河道跡内の焼土に伴い約3,000点の剥片・削片が出土している。

遺構は14カ所の焼土のほか、開拓期に炭焼きに使用したとみられる土壇1基のみであった。



谷藤川右岸遺跡 (J-04-74)

所在地：伊達市萩原町 214 ほか

調査面積：350 m²

発掘期間：平成 2 年 9 月 3 日～9 月 29 日

調査員：佐藤和雄、葛西智義、森岡健治

遺跡の概要

本遺跡は紋別岳と稀府岳の間を西流して内浦湾（噴火湾）に注ぐ谷藤川によって形成された扇状地の扇頂部分、標高 100 m 前後の地点に位置する。

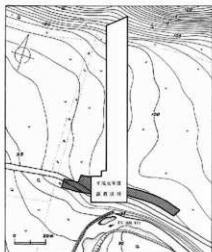
今回の調査範囲は、谷藤川沿いの市道改良部分で、昨年度の調査区を挟むように東側（約 200 m²）と西側（約 150 m²）とに分かれている。

基本的な層序は、第 I 層の表土から第 VIII 層の礫を含む黄褐色ローム層までに分けられるが、遺物包含層は第 VI・VII 層の 2 層だけである。なお、今回の調査では、昨年度第 VII 層中に確認されていた椀別黄褐色火山灰（仮称）を再確認し、さらに第 VII 層最下位からも縄文時代早期の土器を数片検出した。

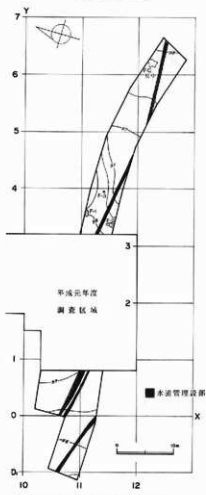
遺構と遺物

今回確認された遺構は、東側の調査区より焼土が 3 カ所と F・C（割片・碎片）集中地点が 1 カ所のみで、掘り込みのある遺構は確認されなかった。このうち、3 カ所の焼土は川に向かって緩く傾斜した第 VI 層～VII 層上面にかけて確認されたが、出土遺物はなく時期は不明である。F・C 集中地点は、調査区の東寄りで確認されており、昨年度 2 カ所検出されたものと一連のものと考えられる。

遺物総数は 3,291 点で、すべて出土地点を計測して取り上げた。内訳は、土器 49 点（縄文時代早期・中期）、石器 2 点、フレイク 13 点と F・C 集中地点で得られた黒曜石のフレイク類が 3,227 点である。出土状況については、細長い調査区内に散在していて、まともにはみられない。なお、前述した縄文時代早期の土器片は、東側調査区の沢跡で検出された。



発掘区と周辺の地形



調査後の地形と遺構位置図

牛舎川右岸遺跡



遺跡近景



P-1完掘



焼土群



遺物出土状況



貝殻文土器（復元前）

稀府川遺跡



遺跡近景

谷藤川右岸遺跡



調査状況



遺物出土状況

共栄3遺跡 共栄2遺跡 上清水2遺跡
上清水4遺跡 東松沢2遺跡

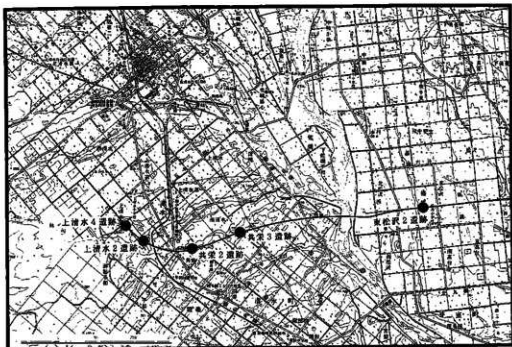
事業名：北海道横断自動車道埋蔵文化財発掘調査

委託者：日本道路公団札幌建設局

十勝平野の中央部を横切る清水～池田間の横断自動車道建設工事は、平成3年度着工が予定され、用地内の埋蔵文化財発掘調査は平成2年度から行われることとなった。

第1年次となる本年度の調査遺跡は当初、清水町内の上清水2遺跡、共栄2遺跡、共栄3遺跡、東松沢2遺跡と芽室町内の北明1遺跡であった。しかしながら、本年度の試掘調査で上清水4遺跡が新たに発見されたほか、北明1遺跡の調査を来年度以降に繰り延べることや共栄3、上清水2、上清水4、東松沢2の各遺跡の調査面積に変更が生じたことから、最終的には上清水4遺跡を加えた清水町内の5カ所の遺跡について調査を実施した。このうち、上清水2、共栄3、東松沢2の各遺跡は来年度も調査が予定されている。

上清水2、上清水4、共栄2、共栄3の各遺跡は、十勝川右岸の高位段丘面に立地しており、日高山脈のベケレベツ岳を源を発する小林川（ヌブチミツ川）の流域沿いに分布する遺跡である。一方、東松沢2遺跡は、十勝川の侵食によって形成された十勝川左岸の中段段丘面に分布する遺跡のひとつである。以下、各遺跡毎に概要等について記す。



遺跡の位置

共栄3遺跡 (L-07-27)

所在地：上川郡清水町宇羽帯北1線 104-5 ほか

調査面積：8,290 m²

発掘期間：平成2年5月7日～10月31日

調査員：越田賢一郎、花岡正光、野中一宏、越田雅司、西脇対名夫

遺跡の概要

共栄3遺跡は小林川沿いに分布する遺跡のひとつで、幕別扇状地の扇端付近に立地している。小林川は十勝川に注ぐ佐幌川の支流のひとつで、本遺跡は小林川と佐幌川の合流点から2 kmほど遡った右岸（標高155 m～160 m）に位置する。幕別扇状地面は光地園面（日高山脈東麓における最高位の平坦面）を構成する礫層を侵食して形成された段丘で、遺跡周辺は地表面の侵食も進み、起伏の大きい波状地形を呈している（地学団体研究会 1978）。

幕別扇状地面の表層部には支笏降下軽石1 (Spfal)、恵庭A降下軽石 (En-a)、樽前d降下軽石 (Ta-d)、樽前c降下軽石 (Ta-c)、樽前b降下軽石 (Ta-b) 等の火山灰およびこれらの降下堆積物に由来する古土壌や腐植質火山灰土が累積している。この面に立地する本遺跡も基本的には同じ堆積物に覆われているが、地表から25 cmほどは耕作のため攪乱されており、黒色腐植土、Ta-c、Ta-b火山灰はほとんどみられない。また、標準土層模式図のⅢ層以下は凍結作用などによるじょう乱現象が顕著に認められる。

調査面積は当初予定、7,290 m²であったが、遺跡が調査区西側に広がるのが予想されたことから、試掘調査を実施した結果、8,290 m²について調査することとなった。



遺跡内の標準土層模式図

文献 地学団体研究会 (1978) 「十勝平野」 地研専報 22

遺構と遺物

調査の結果、縄文時代の住居跡1軒、土壇14基、柱穴様小ピット2基、Tピット32基、竪穴様大型土壇5基（推定）の遺構と約27,000点の遺物、旧石器時代の遺物20点が検出された。このうち、縄文時代の遺物は土層模式図のⅠ～Ⅲ層、旧石器時代の遺物はⅤ層から出土した。

住居跡は径3.5 mの円形を呈する中茶路式期のもので、最も高い位置にある。

土壇および柱穴様小ピットは調査区西半部に分布する。中茶路式土器1個体を伴うP-5と石器製作に関わるとみられるP-4のほかは時期、性格ともに不明である。

Tピットは調査区全域に分布している。長軸が等高線に直行するものと並行するものがあり、列をなすものと単独のものに分けられる。列は2～7個で構成されており、大きく6列認められる。これらの構築時期は覆土上部に黒色腐植土が厚く堆積している点およびTa-cがみら

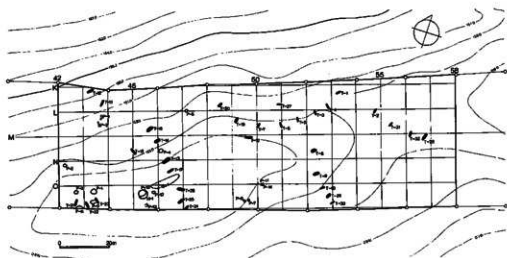
れない点、中茶路式期の主な遺物包含層がⅢ層である点などからみて縄文時代中期を中心とした時期と考えられる。

焼土のうち、縄文時代と考えられるものは3カ所だけで、他は近代のものと思われる。

大型土壌は調査区中央部北側にまとまって分布している。確認したうちの1個は径3×1.5 m、深さ2 mほどの隅丸長方形で、底面付近から炭化木を伴う焼土が検出された。この大型土壌については調査未了のため数量および性格は不明であるが、時期は覆土中にTa-d火山灰が混入していること、確認したうちの1個がTビット(T-19)に切られていることからみて、Tビットの構築時期より古く、Ta-d火山灰の降下より新しい縄文時代前半期のものと考えられる。

縄文時代の遺物のうち、土器は6,600点ほどである。早期のコッタロ式～中茶路式が約6割、中期の柏木川式相当が4割ほどを占め、早期の条痕文土器および晩期末から続縄文期と思われる破片がわずかにある。石器では剝片類が8割弱を占めている。石器組成では石鏃、スクレイパー、すり石類が多く、つまみ付きナイフ、石斧、砥石、黒曜石以外の剝片石器および剝片類はほとんどみられない。このうち、早期とみられるものには柳葉形の石鏃、黒曜石製のポイント様ナイフおよびその素材とみられる剝片、三角柱状のすり石などのほか、石器以外では中茶路式の分布とはほぼ重なる径1 cmほどの土玉が抽出できる。また、中期とみられるものにはポイント、北海道式石冠、台石、石皿などがある。

旧石器確認調査ではIV b層と①層にはさまれた褐色粘土層(V層)の基底付近から、2カ所のスポットが確認された。遺物は黒曜石の剝片と礫のみで、石核、石刃、定形的な石器はない。



共栄3遺跡 遺構位置図



共栄3遺跡 近景



Tピット列 (北から)



H-1 住居跡 (北から)

共栄2遺跡 (L-07-26)

所在地：上川郡清水町字羽帯南2線113番地4ほか

調査面積：1,710 m²

発掘期間：平成2年5月7日～8月31日

調査員：西田 茂、立川トマス

遺跡の概要

本遺跡は、小林川が形成する扇状地上に位置する。標高は169～171 mである。小林川は、日高山脈のベケレベツ岳の中腹に源をもち、約15 km東流して佐幌川に合流する。調査区は、小林川と佐幌川の合流点から約3 km上流に位置し、おもに畑地として利用されている。遺跡の時期は、検出された遺物から縄文時代中期と考えられる。

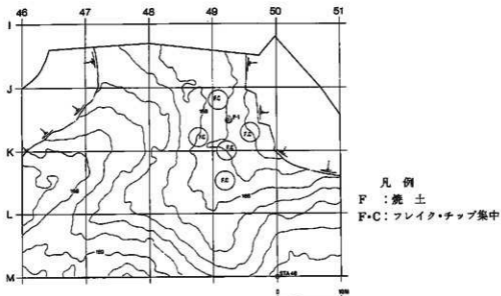
遺構と遺物

今回確認しえた遺構は、縄文時代中期のものと思われる焼土1カ所と黒曜石の剝・削片集中(F・C集中)4カ所である。

遺物は、土器・石器・剝片・礫など約114,600点が出土している。検出された遺物の約9割が、黒曜石の剝・削片である。

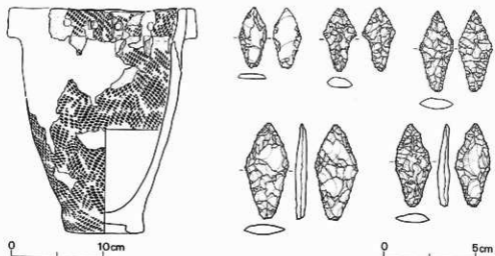
土器は168点出土している。このうち167点が北筒式土器の同一個体の破片で、遺跡の時期を特定できる唯一の遺物である。残る1点は無文の破片である。

石器は、石鎌・石槍・スクレイパー・すり石・石核などが出土している。なかでも、石槍とスクレイパーの出土点数が多い。これら石器のほとんどがF・C集中の中から検出されたもので、約8割が破損している。



共栄2遺跡 遺構位置図

剥片は、そのほとんどがF・C集中に関わるもので、調査区北東部に集中して確認された。集中の範囲は、いずれも直径3mほどである。



共栄2遺跡出土の遺物



調査風景

上清水2遺跡 (L-07-25)

所在地：上川郡清水町字清水第7線29番地1ほか

調査面積：640 m²

発掘期間：平成2年9月20日～10月31日

調査員：西田 茂、立川トマス、三浦正人

遺跡の概要

本遺跡は、日高山脈ベケレベツ岳の中腹に源をもつ小河川、小林川が形成した扇状地の扇尖部に位置する縄文時代早期の遺跡である。標高は187～189 mである。現在的小林川は、山間部を出たのち大きく南流し、東に方向をかえ、約15 kmで佐梶川に合流する。遺跡はこの南から東への変換部の左岸にあり、かなりの広がりを見せるようである。そのほとんどが、デントコーン畑として利用されている。今年度は640 m²を調査したが、事前の範囲確認調査等では、道路範囲外の山寄り（南流する小林川の左岸）で、かなりの数の遺物が採集されている。また、今回の調査後に行われた再確認調査で、道路用地内での広がりが確認されており、来年度以降も引き続き調査を行う予定である。小林川は現在にいたるまでかなり流路をかえていたようで、遺跡の土層では、その痕跡や運ばれた土砂層が幾層も確認できる。遺物包含層は、大きくみて耕作土下3層目の黒色土層である。黒～黒褐色を呈する砂質腐植土層で30～40 cmの厚みをもつ。その下は、小林川の運んだ砂と樽前山起源のTa-d火山灰の混在した堆積・かたくしまった黒色砂質腐植土層・明橙褐色のTa-d火山灰の純粋堆積が10～15 cm・暗褐色砂質腐植土層・砂礫層となる。Ta-d火山灰面で見ると、緩くくぼむ沢跡が二筋確認できる。遺物は、この沢側へ移動したものもあるが、沢と沢の間の高まり全域に分布するものとみられる。

遺構と遺物

遺構は確認されなかった。

遺物は、土器・石器・剥片・礫など725点が出土している。このうち土器は544点あり、ほとんどが、貝殻文・条痕文・無文など、縄文時代早期に属するものである。口縁部には、平縁とゆるい波状の両者がみられ、小波状口縁もある。また、口唇下に刺突による貫通孔のあるものや、焼成後の円形穿孔例も2点みられる。全体で約40個体分が確認できる。底部は約30個体分と多く、いずれも張出しをほとんどもっていない平底である。大槌毛式といわれるものに類似しており、十勝地方では、豊頃町高木1遺跡・音更町友進遺跡などにこの類例が求められる。これに伴う剥片石器は5点出土している。なかでも、茎部と刃部の変換点が明瞭な細長い石鎌3点が特徴的である。剥片や石核も含めて、剥片石器類はすべて黒曜石製である。礫石器は、縄文時代早期に特徴的な断面三角形のすり石2点と、たたき石1点が、出土している。



調查風景



土層断面

上清水4遺跡

所在地：上川郡清水町字清水第7線25番地1ほか

調査面積：900 m²

発掘期間：平成2年8月20日～10月31日

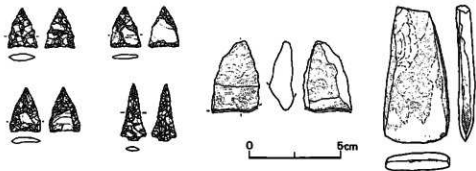
調査員：西田 茂、立川トマス、三浦正人

遺跡の概要

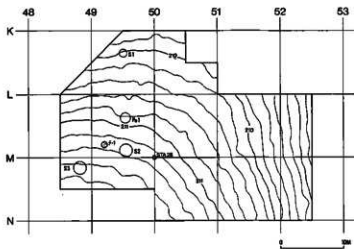
日高山脈の東側山麓、標高207～212mの丘陵端部に位置している。十勝川の支流で東に流れる小林川の北岸にあたり、中位氾濫源との比高は10mほどである。調査着手直前まで採草地になっていたが、数年前までは落葉広葉樹の雑木林であった。

縄文時代中期とみなされる焼土1カ所と礫集中2カ所のほかに、黒曜石の礫・石核の集中1カ所が検出された。

遺物は、土器・石器・剝片・礫など3500点が出土している。土器は、縄文時代前期の網文式土器、縄文時代中期の北筒式土器などである。石器は、石鏃・石槍・石斧・スクレイパー・たたき石・台石などがある。



上清水4遺跡出土の石器



上清水4遺跡 遺構位置図

- 凡例
 F：焼土
 Po：一括土器
 S：集石



調査風景



包含層Ⅱ層 礫集中出土状況



包含層Ⅲ層 土器出土状況



包含層Ⅲ層 土器出土状況

東松沢2遺跡 (L-07-29)

所在地：上川郡清水町字熊牛 11-1152 ほか

調査面積：2,885 m²

発掘期間：平成2年9月3日～10月30日

調査員：鬼柳 彰、遠藤香澄、谷島由貴、山原敏朗

遺跡の概要

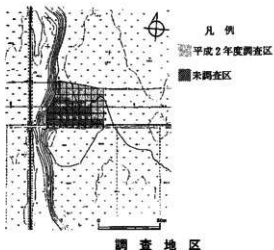
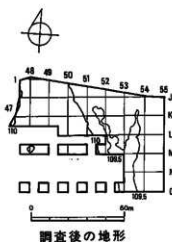
清水町内を南流する十勝川左岸から美憂台地の間には、河岸段丘が発達しており、広い段丘面は畑作や酪農業に利用されている。東松沢2遺跡は十勝川と佐幌川の合流点より約2 km 東方の畑地に位置している。遺跡の西端は段丘崖に面し、下位段丘面との比高が約8 m ある。

遺跡を含む周辺の畑地にはゆるやかな起伏がみとめられ、段丘の縁辺部には縄文時代の土器片や各種の石器、黒曜石の剝片が多数散布している。とくに、北海道式石冠や大型の石皿などが目立つことから、集落跡が遺存する可能性が高い。

土層は耕作土下に黒色土・褐色土・黄褐色土（樽前d火山灰層）・暗褐色土・淡黄褐色土の順に堆積しており、この下に厚い砂礫層がある。今回の調査では暗褐色土上面までを発掘した。遺物包含層は黒色土と褐色土だが、耕作土および黄褐色土上面で多数検出された風倒木痕からも多くの遺物が出土している。

調査区のうち東半部は浅い沢状の地形になっており、遺物包含層が良好にのこされている所があったが、段丘崖に近い西半部は、耕作により黒色土ないし黄褐色土まで、攪乱されている。

今回の調査では、当初対象面積全域(5,630 m²)を発掘する予定だったが、作業員数を充足できなかったことから上記の面積となった。また、道路予定地のうち残地部分を除外することに計画が変更されたため、未調査範囲は1,985 m²、最終調査対象面積は4,870 m²となる。



遺構と遺物

今回の調査で検出された遺構は、調査区南西部でみつかった焼土1カ所のみである。出土遺物は土器片、石器、剝片など計5,666点。土器は縄文時代早期の貝殻条痕文、中茶路式、前期の中野式、押型文土器、内面に縄文のある平底土器、中期の北筒式、晩期のヌナマイ式系土器などで、とくに早期の貝殻文土器が焼土の近くから多数出土している。

石器は、石鏃、ポイント、ドリル、つまみ付きナイフ、スタレイバー、三角形すり石、北海道式石冠、石斧、石皿、砥石、たたき石などがある。遺物の出土層位は、縄文時代早期の土器や同時期のものとみられる石器が黒色土、前期以降とみられるものは褐色土である。

遺物の分布状態をみると、調査区西半部が濃密で、東半部は遺物包含層が良好に存在する部分があるにもかかわらず希薄であった。

今回の調査では、集落跡の発見にはいたらなかったが、焼土が検出された調査区南西部から、調査区外にかけて、住居跡等の遺構が存在するものと推定される。



遺物出土状況



調査状況

フゴッペ貝塚 (D-19-2)

事業名：広域営農団地農道整備北後志東部地区埋蔵文化財発掘調査業務

委託者：北海道後志支庁

整理期間：平成2年4月5日～平成3年3月30日

調査員：千葉英一、長沼 孝、熊谷仁志、中田裕香

調査の内容

フゴッペ貝塚の現地発掘は、平成元年5月から10月に実施したもので、本年度は整理作業のみを行った。整理作業では、土器・石器・土製品・骨角器・自然遺物等の分類・集計や接合復原・実測など基礎的な作業のほか、土器の胎土分析・礫石器に多用されている安山岩の鑑定なども行った。また、住居跡床面や覆土の土壌についてフローテーションを、貝塚部分の土壌についてはウォーター・セパレーションを行い、植物遺存体や動物遺存体などの微小遺物を検出・分析し、貝塚の構成や特性を把握することにつとめた。

このほか、炭化材の¹⁴C年代測定・黒曜石の産地同定・残存脂肪酸分析・動物および植物遺存体の同定をそれぞれ専門機関に依頼した。

遺構と遺物

検出された遺構は住居跡39軒・土坑150基・貝塚3ブロック・焼土23カ所で、時期が次のように推定される。住居跡は縄文時代前期末葉から中期初頭のもの35軒、中期後半の北筒式土器を伴うもの4軒である。土坑は前期末葉から中期初頭のもものが90基、このうち14基は墓とみられる。このほか、7基は中期後半、58基が晩期の土坑である。竪穴住居跡(FH-12)の焼土からは、フローテーションにより、栽培種のヒエの炭化種子が検出された。

貝塚は、いずれも中期末葉北筒式土器の時期に形成されたもので、平玉・鈿頭・骨針・刺突



遺跡の位置

具・釣針の未成品などの遺物がある。自然遺物のうち貝類はイガイを主とし、ヤマトシジミ・コベルトフネガイ・ウチムラサキガイ・オオウウラタなどもわずかにみられる。このほか、海獣・シカ・キツネ・トリなどの骨が検出されている。

出土遺物は土器片・石器・剥片・骨角器など計 120 万点あまりに及んでいる。土器は、縄文・続縄文・擦文の各時代のものがあるが、主体は縄文時代前期末葉（円筒土器下層 d 式）から中期初頭（円筒土器上層 a 式）に相当するもので、中期末葉の北筒式がこれに続く。

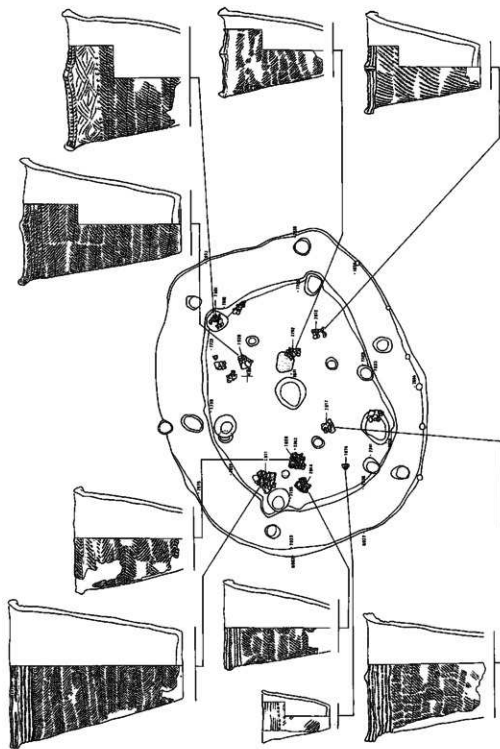
石器のうち、剥片石器には石鏃・石錐・ポイント・つまみ付きナイフ・スタレイバー・楔形石器など、礫石器には石斧・すり石（北海道式石冠を含む）・たたき石・くぼみ石・砥石・石皿・台石などがある。このほか、土偶・有孔土製円板・球状耳飾・垂飾が出土している。礫石器のうち、大型の石皿・台石などが非常に多いことが指摘できる。

土器の分布は時期毎に多少異なる傾向が認められた。主体である前期末葉から中期初頭の土器は、これまで断片的な資料しか知られておらず、本遺跡のように、住居跡から各種の石器とともに大量に出土し、また多量に復原されたのは道内でも初めてで、土器の組成、形態、文様の変遷を知る上で貴重な資料である。

また、これまで出土が道北部に偏り、北方の影響が強いと考えられていた押型文土器・刺突文土器（シュブノツナイ式）・網走式土器が出土している。このうち、押型文と刺突文土器は、住居跡覆土上部で出土した円筒土器下層 d 式から円筒土器上層 a 式に相当する土器の下部から検出されている。さらに、円筒土器下層 d 式の体部に、連続山形の押型文が施された土器が出土したことから、円筒土器下層 d 式と押型文土器の接触が確認された。押型文土器を研究する上で貴重な資料といえる。

今回の調査結果から、本遺跡は道央部における縄文時代前期末葉から中期初頭の標識的な遺跡になるものと考えられる。

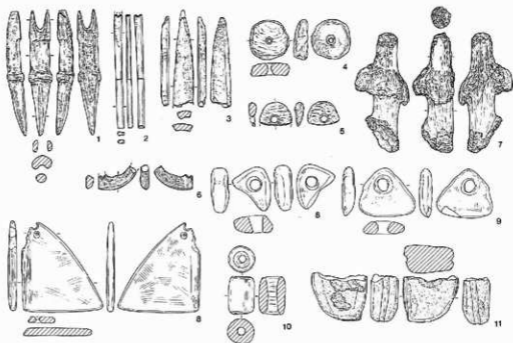
遺物総点数		(点)	土 器		(点)	石 器		(点)
土 器	254,264		縄文早期	2,070	剥片石器	7,625		
石 器	21,034		前 期	155,972	礫 石 器	13,409		
剥片・石核	752,019		中 期	62,476	計	21,034		
礫	217,324		後 期	1,982				
土 製 品	200		晩 期	11,783				
石 製 品	12		続 縄 文	28				
骨 角 器	8		擦 文	118				
そ の 他	2,868		そ の 他	19,835				
計	1,247,729		計	254,264				



F H 一 12 住居跡出土の須原土器 (縮尺不可)

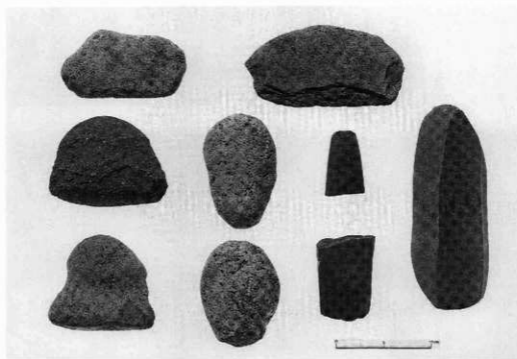
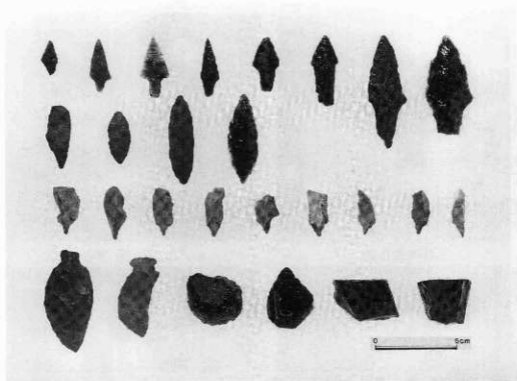


FH-12 出土の土器



1 鋌頭 2 骨針 3 刺突具 4・5 貝製平玉 6 釣針未成品
7 加工痕のある鹿角 8 球状耳飾り 9~11 垂飾 12 有溝石製品 (縮尺不同)

骨角器と石製品



貝塚出土の石器



土器復原作業



土器実測



石器の接合



石器実測



土器拓本作業



自然遺物の細別作業

3. 研修・研究会等

(1) 研修会・研究会参加

- * 奈良国立文化財研究所埋蔵文化財発掘技術者研修
「保存科学基礎課程」 参加者 田口 尚 4月17～27日
「中近世窯器調査課程」 参加者 越田雅司 6月15～26日
- * 埋蔵文化財写真技術研究会（奈良市） 7月6・7日
参加者 森岡健治
- * アイヌ民俗文化財専門職員等研修会（札幌市） 8月1～3日
参加者 佐藤和雄・田才雅彦・田口 尚・越田雅司
- * 全国埋蔵文化財法人連絡協議会研修会（会津若松市） 9月19・20日
参加者 菅原俊紀・越田賢一郎・吉田貴和子・環田千秋
- * 清水町内遺跡発掘報告会（清水町） 10月26日
発表者 野中一宏
- * 中・四国縄文研究会 10月27・28日
発表者 西脇対名夫「九州からみた瀬戸内地方後期前半の編年」
- * 北の鉄文化シンポジウム（盛岡市） 11月3日
発表者 越田賢一郎「療文・アイヌ期における北海道の鉄」
- * 南北海道考古学情報交換会（森町） 12月1・2日
参加者 大沼忠春・長沼 孝・熊谷仁志・三浦正人
森岡健治・越田雅司・山原敏朗・西脇対名夫
- * 第4回東北日本の旧石器文化を語る会（札幌市） 12月8・9日
発表者 長沼 孝 「北海道函館市石川1遺跡」
- * 北海道考古学会発掘調査報告会（札幌市） 12月15日
発表者 大沼忠春 「千歳市美々8遺跡」
- * 道北地区考古学談話会（旭川市） 3月16・17日
助言者 大沼忠春・熊谷仁志

(2) 展覧会等協力

- * 北海道開拓記念館第82回テーマ展
「掘り出された北の歴史—— 北海道埋蔵文化財センターの発掘から——」
(於) 北海道開拓記念館 4月6～22日
- * 北海道教育委員会主催第15回道民ホール文化財展
「続縄文時代・療文時代の北海道」
(於) 北海道庁道民ホール 2月4～8日

(3) 部内研修・研究会

*講演会

「旧石器の周辺」

講師 東北大学名誉教授 芹沢長介氏 (於) ホワイトランド イン 札幌 12月7日
(講演内容は、II章にまとめました)

*研修会

「自然科学的分析の現状と課題——種子の同定を中心にして——」

講師 北海道大学助教授 吉崎昌一氏 4月10日

*発掘調査現地研修会

「低湿地遺跡の調査方法と木製品の一次処理について」

講師 調査第2課 田才雅彦・田口 尚 (於) 千歳市美々8遺跡 9月14日

*発掘調査報告会

「遺跡調査報告」(スライド使用) 11月22日

*研修報告会

第1回研修報告会 12月18日

第2回研修報告会 3月予定

(4) その他

*平成2年度文部省科学研究費奨励研究(B)

「北海道における中・近世考古学の研究——金属製品を中心にして——」 三浦正人

「北海道渡島半島知内川流域の段丘と更新世火山灰層序」 花岡正光

「中世北海道における食風について」 鈴木 信

4. 刊行報告書

平成元年度刊行

- 第61集 伊達市 牛舎川右岸遺跡・稲府川遺跡
——北海道縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書——
- 第62集 美沢川流域の遺跡群 IX
——新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書——
- 第63集 深川市 納内6丁目付近遺跡 II
——北海道縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書——
- 第64集 伊達市 谷藤川右岸遺跡
——北海道縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書——
- 第65集 仁木町 モンガク丘陵の遺跡群
——北後志東部地区広域営農団地農道整備事業用地内埋蔵文化財発掘調査報告書——
- 第66集 余市町 栄町5遺跡
——北後志東部地区広域営農団地農道整備事業用地内埋蔵文化財発掘調査報告書——
- 第67集 余市町 登町2・3遺跡
——北後志東部地区広域営農団地農道整備事業用地内埋蔵文化財発掘調査報告書——

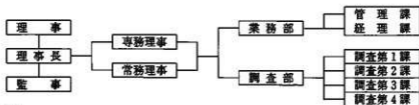
平成2年度刊行予定

- 第68集 伊達市 牛舎川右岸遺跡・稲府川遺跡・谷藤川右岸遺跡 II
- 第69集 美沢川流域の遺跡群 X
- 第70集 清水町 上清水4遺跡・共栄2遺跡・共栄3遺跡
- 第71集 滝里遺跡群 I 滝里23・38・39・7遺跡
- 第72集 余市町 フゴッペ貝塚

5. 組織と機構

役員

理事長	寺山 敏保	北海道教育委員会教育長
専務理事	永田 春男	北海道埋蔵文化財センター
常務理事	竹田 輝雄	北海道教育庁生涯学習部文化課主幹
理事	今井 道雄	北海道文化財保護協会会長（9月4日死亡）
理事	高倉 新一郎	北海道大学名誉教授（6月7日死亡）
理事	大場 利夫	札幌市文化財保護審議会委員
理事	峯山 巖	北海道文化財保護協会副会長
理事	藤本 英夫	北海道文化財研究所長
理事	鈴木 弘泰	北海道企画振興部長
理事	斉藤 孝雄	北海道教育庁企画管理部長
理事	石田 昌敏	北海道教育庁生涯学習部長
監事	田上 吉也	北海道国際文化協会会長
監事	堀川 芳郎	北海道副出納長兼出納局長



職員一覧

業務部

職	氏名	所屬
業務部長	○伊藤 庄吉	
管理課長	○菅原 俊紀	管理
主任	葛西 宏昭	〃
嘱託	蒲坂 惣次郎	〃
〃	藤田 千秋	〃
〃	藤田 忠雄	〃
経理課長	○石橋 光三	経理
主任	菅野 聡	〃
〃	吉田 貴和子	〃
嘱託	重平 洵	〃

調査部

職	氏名	所屬
調査部長	○中村 福彦	
調査第1課長	○鬼柳 彰	第1課
主任	佐藤 和雄	〃
〃	遠藤 香澄	〃
〃	葛西 智義	〃
文化財保護主事	谷島 由貴	〃
〃	森岡 龍治	〃
嘱託	山原 敏朗	〃
〃	藤本 昌子	〃

職	氏名	所屬
調査第2課長	○大沼 忠春	第2課
主任	和泉田 毅	〃
〃	○田才 雅彦	〃
〃	○工藤 研治	〃
〃	田口 尚	〃
嘱託	鈴木 信	〃
調査第3課長	○越田 賢一郎	第3課
主任	西田 茂	〃
〃	立川 トマス	〃
〃	三浦 正人	〃
〃	花岡 正光	〃
〃	野中 一宏	〃
嘱託	越田 雅司	〃
〃	西脇 対名夫	〃
調査第4課長	○千葉 英一	第4課
主任	○長沼 孝	〃
〃	佐川 俊一	〃
〃	熊谷 仁志	〃
文化財保護主事	○中村 裕香	〃
嘱託	皆川 祥一	〃

○印は派遣（道教委）職員

II. 講演会記録

『旧石器の周辺』(要旨)

東北福祉大学教授 芹沢長介
東北大学名誉教授

新しく北海道から発掘された資料を昨日から拝見させていただいて、感銘深く思っていたところでございます。こういう貴重な資料を毎日整理されていらっしゃる方々には、私のように少し古いことをやっている者の話は、あまり参考にならないと思いますが、私が今まで辿ってきた道、それから研究をしてきたことについて、多少のご参考になるかもしれないと思って、お話を引受けることにしたのです。



講師 芹沢長介氏

私は、かねがね日本の縄文時代の前にも人間が住んでいたのではないかということ、中学生(旧制中学)のころから、ひそかに考えていました。たまたま昭和24年の7月、東京で相沢忠洋という人に会いまして、その人の口から、群馬県の桐生市の西南方4キロメートルぐらにある岩宿という孤立丘の真中を走る切通し道の崖面の赤土層の中から、黒曜石で作られた石器が出てきたという話を知らされたのです。その時に縄文時代の土器の出る層、黒土層の下に堆積している赤土の中から石器が出るということを始めて知ったのであります。地質学、考古学の専門家が数十年間無視してきた赤土層、この赤土層は火山灰の堆積であるから、この中からは石の道具が発見されるわけがないということが、地質学会、考古

学会の常識だったのです。東京や北関東を歩きますと、道路の断面などどこでも赤土の層が見られるのであります。その赤土を注意して観察しようという人が、一人もなかったのであります。モールズが日本の考古学の第一歩を踏み出してから70年間無視され続けてきた赤土の中から、石器が出るということを相沢忠洋が自分の目と手で確かめたということ、相沢さんの口から聞かされまして、非常に大きな衝撃を受けまして、これで日本の旧石器問題は解決ができるということを直感的に感じたのであります。

その後、相沢さんが約1カ月の間、たびたび赤土の崖面を訪れまして採集した資料を8月の末に東京の私の所へ持ってきて見せてくれました。土器片は1点もなく、石器あるいは石器を作る時の剥片だけです。材料は黒曜石とか頁岩とかチャート、いろんな石がありましたけれども、土器のないということが大きな特徴であり、しかも、縄文時代の黒土層の下の関東ローム層から出てくる。これで、おそらく日本にも縄文時代以前の旧石器時代があるということが、

明らかになったわけでありまして。第1回の発掘は、私が明治大学におりましたので、明治大学の考古学研究室が中心になりまして、9月の10日前後に試掘、10月に調査が行なわれました。調査といっても今の発掘調査に比べますと、子供のいたずらみたいなものです。わずか1週間、10人ぐらいの学生を連れて行って掘りました。崖を削って関東ローム層の中から石器を掘り出して意気揚々と帰った、ただそれだけです。今の文化財調査の担当者から見れば、調査などということが出来ないぐらい原始的な発掘でした。それでも石器、剥片合わせて百数十点出てまいりまして、これが日本で旧石器の最初の発掘になったのであります。それ以来、九州から北海道まで全国で旧石器時代の遺跡が、おそらく5,000カ所を超えるのではないかと考えられるまで、旧石器時代の研究は進展を続けてきたのですが、これもすべて昭和24年に相沢忠洋が岩宿の崖面から石器を見つけてくれた、これにかかっているわけです。相沢さんが見つけなくても、数年先に誰かが見



岩宿遺跡の遠景

つけたかもしれませんが、やはり数十年間黙殺されてきた、崖面から石器を見つけるという誰もやったことがない事を為遂げたということ、相沢さんの功績は、モールスの大森貝塚の発掘に比べられるほどの大きな意義を持つていると思います。一時、相沢さんが納豆売りをしていたとか、小学校出た位の学歴しかないとか、いろんな事を言いまして、相沢さんの功績を無視しようとする動きがありました。私はこれに対して、ことさらに相沢さんの功績を事あるごとに書いて、相沢さんの仕事の意味を学会に訴え続けたのであります。最近ではそういうことも理解されてきたようであります。

昭和24年に相沢さんの発見があって、岩宿が明らかになって数年後には、北海道にも旧石器の遺跡があるんじゃないかということが、問題になったわけでありまして。吉崎昌一君は昭和27、28年頃大学に入って来たと思いますが、夏休みに入ると北海道に出かけて、白滝あたりの遺跡を歩いて石器を採集し、それを大学へ持ってきて北海道にも旧石器があるということを私共に話してくれたのであります。昭和30、31年頃、私も吉崎君と一緒に北海道各地を歩きました。特に、白滝遺跡では、白滝13地点、24地点など代表的な遺跡を発掘しました。本州では見られないような黒曜石のりっぱな石器が、ぞくぞくと出ることに驚きを新たにしましたことを今でも覚えております。その時の写真がありますので、あとでご紹介したいと思います。

もう一つ、旧石器時代の問題と同じ程、私が関心を持っておりましたのは、日本の縄文土器

の起源の問題でございます。縄文土器研究の最高の権威でありました山内清男先生が東大におられまして、縄文土器の起源はいくら古くても5,000年を遡ることはないだろうと主張しておられました。しかし、私はもう少し古くなるのではないかとこのことを以前から考えていました。私の旧制中学生の頃、江坂輝弥とか白崎高保という考古学の仲間がおりました。たまたま、貝塚巡りなどでばったり会って友達になった人たちです。白崎は後に工業大学の教授になった人ですが、板橋区の稲荷台という所から燃糸文のついた尖底の土器片を見つけました。彼はこの土器が非常に古いものではないかと考え、山内先生の所へ持ち込んだのでありますが、山内先生は縄文中期の文様と同じであるから、そんな古いものではないと言って一蹴されたのであります。白崎は長い間そこへ通って、ついに尖底の部分まで見つけた。それで山内先生も、もしかするとこれは古い土器ではないかと考えを改められたようであります。昭和12年頃、私と江坂、白崎など旧制中学生だけで稲荷台遺跡を発掘して、リング箱2、3ばいの土器片を見つけました。これを白崎が『古代文化』に、昭和14年に発表いたしました。

白崎は、日本には南北二つの系統の土器がある、一つは稲荷台土器に代表されるような回転押捺文系統で、もう一つは函館の住吉町に代表されるような貝殻文・沈線文の系統で、南方と北方二つの系統の土器の流れが関東地方で合流して、日本独特の縄文土器が出来たということ、学会の雑誌に発表したのであります。白崎の考えによりますと、その稲荷台土器は関東ローム層の直上から出て来る。しかも5センチから10センチほど赤土に潜って出てくることがある。関東ローム層の終末は1万年前ということであるから、稲荷台土器の年代は少なくとも7,000年から8,000年前であるということを書いたのです。山内先生はこのような考え方を否定されていたのですが、私の恩師の後藤守一先生—古墳時代の研究者—が白崎説を非常に高く評価しまして、昭和18年頃に書かれた考古学の概説の中に、日本の縄文土器は8,000年ぐらい前まで遡るだろうということを述べられ、白崎の説をそのまま引用されており、しかも、もしかしたら稲荷台のもう少し前に旧石器時代の文化も日本にあったのではないかとまで書かれているのであります。

昭和25年、神奈川県夏島貝塚の発掘が行われて、その時に夏島貝塚では一番下層に、私が夏島式土器と命名した燃糸文の貝層があり、その下に更に古い井草式土器(燃糸文)の層があった。夏島式土器の出た層から炭を採取し、これをミシガン大学に送って年代測定をしたところ、9,200年から9,500年前という結果が出ました。白崎、江坂もそうですが、私たちが以前から考えていた年代にびたりと合致したのです。非常に愉快的な気持ちを感じたのでありますが、山内先生は烈火のごとく怒りまして、こういう年代を出すような放射性炭素法は一切信用しないという談話を発表した。さらに、放射性炭素法を引用して論文を書くような研究者はアメリカ帝国主義の手先であるとか言われたのでありますが、そういう山内先生は亡くなるまで5,000年説を貫き通されたのでした。

昭和35年から私は岡山理科大学の鎌木義昌教授と一緒に長崎県北松浦郡の福井洞穴の発掘を行いました。そこでは一番上の層に縄文早期、約8,000年前の押型土器があり、その下に

爪形文土器の層がありました。さらに、3番目にうどんのような粘土紐を貼り付けた隆線文土器の層がある。第4番目の層では土器がなくて細石刃だけの層になる。第3番目の隆線文の出土層の木炭を学習院大学に送って調べたところ、これが12,000年前という年代が出た。夏島が9,000年前なんです。福井洞穴の隆線文土器はそれより3,000年古い12,000年前とい



福井洞穴

う年代が出たのであります。この年代が発表されますと、山内先生はもちろんですが、日本の研究者の中からも、この年代は非常に古過ぎて信用できない、きわめて疑わしいという批判が出ました。これをそのまま認めようとする人はほとんどいなかったのです。

ところがその後、同じような隆線文土器が出る洞穴とか、ほかの遺跡の年代測定、放射性炭素法とか熱ルミネッセンス法など、いろんな方法を使いましても、やはり隆線文土器の年代は10,000年から11,000年以上前という年代が、相次いで出るということが判りました。この結果、日本の土器の起源、土器の発生の年代は少なくとも1万年は超すだろうということが、ほぼ学会でも認められるようになったのだから私は考えております。今でも山内説を継承している人がいるようですが、しかし、1万年を超す土器の年代は動かないのではないかと。最近では、バイカル湖の南、あるいはアムール川流域でも12,000年というような土器の年代が何か所か報告されています。中国とか韓国では、8,000年までは出ているようです。それより古い例はまだ見つからないのでありますが、おそらく私の予想では、将来中国でも韓国でも1万年を超す土器が当然出て来るだろうと考えています。東アジア全体の石器時代の継起の問題を冷静に見た場合には、どうしてもそう考えざるを得ないので



福井洞穴の土器片 上段(第2層) 下段(第3層)

あります。

私の第3番目の関心は、日本旧石器時代の始源の問題です。岩宿発見以来、約10年から15年ぐらいますと、日本全国から同じような旧石器時代遺跡はどこからでも発見されるようになってきた。しかし旧石器時代遺跡の年代は1万年から3万年前の間にすべて含まれてしまうということが判ってまいりました。これはヨーロッパでは洞穴芸術とか旧石器時代のビーナスという象牙製の裸体像など非常にりっぱな芸術品を生み出した時代であります。それ以前の3万年から約8万年前までヨーロッパではネアンデルタール人による中期旧石器時代が続いております。さらに8万年前から200万年ぐらい前までは、原人や猿人が活躍する前期旧石器時代がありまして、この前期旧石器時代が約200万年近く続いたのであります。

日本では岩宿発見以来、3万年前までの遺跡は各地で発見されたのでありますが、それ以前の人類が住んでいた証拠はほとんど見つからなかったのであります。私が東北大学に勤務するようになりまして2年目の昭和39年、九州の別府湾の北のはずれにあります速見郡日出町の早水台という遺跡の発掘に参加いたしました。この発掘は縄文時代早期の集落を明らかにすると



早水台遺跡の全景

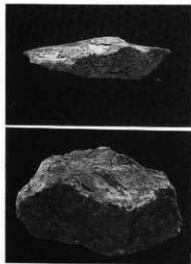
いう目的で、大分県教育委員会が始めたのでありますが、発掘が終る最後の日に基盤まで掘ってみようということで私共はトレンチを3メートルの深さまで掘りました。そうしますと、基盤の直上から今まで見たこともないような石器が3点ほど出てまいりました。これを東北大学に持ち帰ってしばらく眺めておりました。どうも気になって仕方がない。これは今まで日本では出たことがないような古い石器ではないかというように考えていたのですが、4月になって学生を数人連れて行って第2回目の早水台遺跡の発掘をしました。今度は最下層だけを目標にして掘りました。考えた通り約200点ぐらいの、今まで見たこともないような、非常に古いタイプの石器を発掘しまして、ここで私は、日本にも3万年より古い前期旧石器時代があったのではないかということを学会に発表したのであります。

しかし、なかなか新しい考え方というのは学会に受け入れられないというのが常道でありまして、岩宿遺跡の発見が認められたのは、発見から10年から15年後のことでした。北海道から九州まで同じような遺跡が発見されてまいりますと、遺跡の発掘を担当した若い人たち、あるいは、それに理解を示す人たちが、だんだん旧石器時代文化の存在を認めるようになったのです。また、同じようなことが早水台遺跡の発掘以後、前期旧石器時代の存在に関しては岩宿の

場合以上に頑固な学会に私は失望したのであります。

日本の考古学界は、いつも新しい考え方に対しては閉鎖的でありまして、前期旧石器時代についても簡単には受け入れてもらえないだろうということは、最初から予想していたことであります。しかし最近東北大学出身の若い人たちが中心になって、特に宮城県の仙台市あるいは仙台市周辺の遺跡の発掘を行って、3万年よりも古い遺跡の検出に成功しています。

最近では東京都や福島県あたりまで同じような遺跡の探索が伸びています。前期旧石器時代の存在というものがある程度認められるようになってきたのは、大変喜ばしいことではないかと私は考えているわけですが、このような問題についてスライドを使いながら具体的に説明したいと思います。



早水台遺跡出土の
チョッピング・ツール

調査年報 3

平成2年度

平成3年2月28日発行

編集・発行 財団法人 北海道埋蔵文化財センター
〒064 札幌市中央区南26条西11丁目
☎(011) 561-3131

印刷 奥国印刷株式会社
〒063 札幌市西区西町南13丁目1-40
☎(011) 661-2221 代

